



大和
思想

六章

第六章 「共存共栄の世の中」における「人間関係」のあり方

目次

序文

相手を「尊重」する

常に「気遣い」をする

「年長者」は「年少者」をいたわり、導く 「年少者」は「年長者」に素直に従う

男女は互いに「思いやり」を持って接する

「親」は「子」をしっかりと育てる 「子」は「親」をしっかりと養う

「老人」を敬う

まとめ

第六章 「共存共栄の世の中」
における「人間関係」のあり方

序文

それでは、ここから、六章に入りたいと思います。

六章では、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方について説明したいと思えます。

人間が「幸福」になるためには、『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠です。

ですから、『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられる世の中）』を實現させ、維

持する」ためには、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」必要があります。

また、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、「世の中の全ての人の尊厳を保つこと」ができる『人間関係』のルール」をつくる必要があります。

そして、世の中の全ての人が、常に、その「『人間関係』のルール」に従って、人と接する必要があります。

「『人間関係』のルール」と言うと堅苦しく思いかもしれませんが、全ての人は、人と接するときに、少なからず、「この人には、どう接するべきか」「どういう『言い方』をするべきか」「これは言うべきか、言うべきでないか」等を考えて接しています。

つまり、全ての人は、人と接するとき、常に、何らかの「判断の基準（規則、ルール）」に従って接しています。

「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、この「判断の基準」を、「世の中の全ての人の尊厳を保つこと」ができる『人間関係』のルール」にする必要があります。

つまり、「子供」「大人」「老人」「男性」「女性」「裕福な人」「貧しい人」「能力が高い人」「能力が低い人」「政治家」「国民」、また、「職業」にかかわらず、「文化」にかかわらず、「国籍」にかかわらず、「世の中の全ての人の尊厳を保つこと」ができる『人間関係』のルール」にする必要があります。

そして、世の中の全ての人が、常に、それに従って人と接する必要があるのです。

『世の中の全ての人の尊厳を保つこと』ができる『人間関係』のルール」をつくり、世の中

の全ての人が、常に、それに従って人と接する。

そうすることによって、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つこと」ができるのです。

さて、このように、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、「世の中の全ての人の尊厳を保つこと」ができる『人間関係』のルールをつくる必要があるのですが、この『人間関係』のルールが、これから説明する『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方」です。

ですから、世の中の全ての人が、常に、これから説明する『人間関係』のあり方」に従って人と接すれば、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つこと」ができます。

『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方」が分からなければ、人と接するとき、「どのような点に注意すればいいか」が分からないので、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つこと」はできません。

ですが、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方」をしっかり理解していれば、誰と接するときでも、それが分かるので、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つこと」ができ

るのです。

ですから、これから説明することは、しっかり理解してください。

そして、人と接するときは、常に、それに従って接してください。

常に、それに従って接することによって、あなたが普段接する全ての人の「尊厳」を保ってほしいと思います。

相手を「尊重」する

※ここで言う「相手を『尊重』する」とは、「相手を『尊い存在』『価値ある存在』として大切にする」という意味です。

『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方の「根本」は、「相手を『尊重』すること」です。

人間が「幸福」になるためには、「自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）」によって得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠です。

ですから、「『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられる世の中）』を實現させ、維持する」ためには、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」必要があります。

また、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、世の中の全ての人が、互いに「相手を『尊重』する（『尊い存在』『価値ある存在』として大切にすること）」必要があります。

もし、世の中の全ての人が、互いに相手を「尊重」せず、互いに相手を「軽視」し、「いい加減」に接していたら、世の中の全ての人の「人間関係」は悪くなり、全ての人が「対立」することになります。つまり、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つこと」はできなくなります。

逆に、世の中の全ての人が、常に、互いに相手を「尊重」していれば、全ての人が仲良くすることはないとしても、全ての人が根本から「対立」することはありません。

人間は、それぞれが「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、「意見」や「考え」が合わないことがありますし、ときには「対立」することもあります。

ですが、どのようなことがあっても、「相手を『尊重』すること」を忘れなければ、根本から「対立」することは不会いのです。

このことから分かるように、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、世の中の全ての人が、互いに「相手を『尊重』する」必要があるのです。

ですから、このことから、「相手を『尊重』すること」は、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方の「根本」だと言えるのです。

さて、このように、「相手を『尊重』すること」は、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方の「根本」なのですが、「相手を『尊重』すること」は、本来は、全ての人

にとつて当然のことであり、「全ての人が、当然のこととして行なうべきこと」だと言えます。

三章で説明したように、どのような「全体」においても、「全体を構成する全ての人」は、『その全体の活動の一部分』を担っている状態』で存在しています。

ですから、「人間社会」においても、『人間社会』を構成する全ての人』は、基本的には、『人間社会をいい状態で存続させるための活動の一部分』を担っている状態』で存在して
ます。

経済活動をし、「国家」に税金を納めるのは、「人間社会」を支える重要な行為です。

子供を産み、しっかり育てるのも、「人間社会」を支える重要な行為です。

また、特別なことはしていなくても、「世の中の調和」を乱さずに生きていけば、それは、『人間社会』を支えている』ということなのです。

これらのことから分かるように、世の中の全ての人は、基本的には、『人間社会をいい状態』で存続させるための活動の一部分』を担っている状態』で存在しているのです。

また、このことから分かるように、世の中の全ての人は、本質的には、「人間社会を『いい

状態」で存続させる」ための「協力関係」「仲間関係」にあるのです。

また、世の中の全ての人は、誰にとっても、「『人間社会の一部分』を担う『尊い存在』
『価値ある存在』」なのです。

ですから、世の中の全ての人は、本来は、誰と接するときでも、当然のこととして、「相手
を『尊重』する」べきなのです。

このように、「相手を『尊重』すること」は、本来は、「社会的生き物」である人間にとっ
ては当然のことであり、「全ての人が、当然のこととして行なうべきこと」なのです。

ですから、このような理由からも、「相手を『尊重』すること」は、「『共存共栄の世の中』
における『人間関係』のあり方」の「根本」だと言えるのです。

さて、このように、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、世の中の全ての人が、
互いに「相手を『尊重』する」必要がありますし、「相手を『尊重』すること」は、本来は、
「社会的生き物」である人間にとっては当然のことなのです。

ですから、「相手を『尊重』すること」は、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方の「根本」だと言えるのです。

全ての人には、「考えが合わない人」や「利害が対立する人」がいますし、全く接点のない「他人」もいます。

そして、多くの人は、そのような人に対しては、「尊重」する気持ちを失いがちです。

ですが、『共存共栄の世の中』を表現させ、維持する「ためには、世の中の全ての人が、どのような人と接するときでも、「相手を『尊重』する」必要があるのです。

また、世の中の全ての人は、『世の中の一部分』を支える重要な存在「なので、そのような意味でも、「全ての人を『尊重』する」必要があるのです。

「自分の子供」「親」「友人」「隣人」「男性」「女性」「年長者」「年少者」「先生」「生徒」「政治家」「国民」「裕福な人」「貧しい人」「能力が高い人」「能力が低い人」「考えが合わない人」「利害が対立する人」「他人」、その他どのような人と接するときでも、「相手を『尊重』する」の

です。

これが、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方の「根本」なのです。

常に「気遣い」をする

※ここで言う「気遣い」とは、「相手の『気持ち』や周りの人の『気持ち』を察し、『人間関係』が『互いの尊厳が保たれている状態』になるように立ち居振る舞うこと」「その場の空気をしっかり読んで、その場にいる人を『嫌な気分』にさせないように立ち居振る舞うこと」という意味です。

また、『気遣い』をする「上で重要なのは、「相手の『気持ち』や周りの人の『気持ち』をよく考えて察すること」と『相手や周りの人との人間関係を、互いの尊厳が保たれている状態にする』ため、『その場にいる人を嫌な気分させない』ためには、どうすればいいかをよく考えること」です。

これらをしっかりと行なうことによって、「『気遣い』をすること」ができるのです。

『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する「ためには、「常に『気遣い』をする」という『人間関係』のルール」が必要になります。

ほとんどの人は、どのような人と知り合っても、知り合った当初は「気遣い」をするので、「人間関係」は「いい状態（互いの『尊厳』が保たれている状態）」に保たれます。

ですが、「人間関係」が長く続くと、「緊張感」が薄れ、「遠慮」をしなくなる。「『わがまま』を言う」「『自分勝手な行動』をする」というように、「気遣い」をしなくなるので、「人間関係」は「悪い状態（互いの『尊厳』が保たれていない状態）」になります。

このように、「人間関係」は、「気遣い」をしているうちは「いい状態（互いの『尊厳』が保たれている状態）」に保たれますが、「気遣い」をしなくなると「悪い状態（互いの『尊厳』が保たれていない状態）」になります。

ですから、このことから、「人間関係」を「互いの『尊厳』が保たれている状態」に保つた
めには、「常に、互いに『気遣い』をする」必要があると言えるのです。

さて、「人間関係」を「互いの『尊厳』が保たれている状態」に保つためには、「常に、互
いに『気遣い』をする」必要があるので、『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられ
る世の中）』を表現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人が、誰と接するときでも、
「常に『気遣い』をする」必要があります。

人と接するときには、「自分は良くて、相手はどう思うか」をよく考えます。

周りの人が「大丈夫」と言っているとしても、「本当に大丈夫か」をよく考えます。

「言われなければいい」「これくらいなら大丈夫だろう」とは考えず、「相手を『嫌な気分』
にさせないように」「失礼のないように」と考えます。

何をどうすれば「相手が『喜ぶ』か」「周りの人が『嫌な気分』にならないか」をよく考え
ます。

そして、「気遣い」をするのです。

『せき』をするときは、口を手でふさぐ」

「『作業に集中している人』がいたら、作業の邪魔をしないようにする」

「自転車や自動車で歩行者を追い越すときは、相手を驚かさないように、距離を開け、速度を落として追い越す」

「タバコを吸うときは、タバコを吸わない人を気遣って、窓を開け、煙りを外に出す」

「落ち込んでいる人がいたら、『自分のうまくいっていることの話』や『自慢話』をしないようにする」

「落ち込んでいる人がいたら、声を掛けて励ます」

「困っている人がいたら、心配し、助けてあげる」

「言いたくても、周りの人が『不快』に思うようなことは言わない」

「したくても、周りの人が『不快』に思うような立ち居振る舞いはしない」

「相手が『言いたいこと』をうまく言えないようなら、うまく言えるように導いてあげる」

「『一つしかないもの』を使うときは、自分ばかりが使わず、相手にも使わせてあげる」

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人が、常に、このような「気遣い」をする必要があるのです。

「『気遣い』をすること」に慣れていない人は、「常に『気遣い』をしていたら疲れる」と思うかも知れません。

もちろん、常に、「必要以上の気遣い」をしていたら疲れますし、「苦手な人」や「理不尽な人」と接していると、「気遣い」をすることによってではなく、「苦手な人」だから「理不尽な人」だから」という理由で疲れます。

ですが、「気を遣うポイント」を理解し、「『気遣い』をすること」に慣れれば、「『気遣い』

をすること」によって疲れることはありません。

むしろ、「常に『気遣い』をすること」によって、「人間関係」が「いい状態（互いの『尊厳』が保たれている状態）」に保たれるので、「ストレスによる疲れ」はなくなるのです。

また、「気遣い」を全くしなかったら、悪気はなくても、相手を傷つけたり、周りの人に「嫌な思い」をさせたりして、「人間関係」が悪くなる場合がありますが、常に「気遣い」をしていれば、そのようなことは起こらないのです。

このように、「常に『気遣い』をしていたら疲れる」と思いかもしれませんが、実際は、「常に『気遣い』をする」からこそ、「人間関係を『互いの尊厳が保たれている状』に保つこと」ができるのです。

これらのことから分かるように、「『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられる世の中）』を表現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人が、「常に『気遣い』をする」必要があるのです。

「『人間関係をいい状態（互いの尊厳が保たれている状態）に保つこと』ができるかどうか」「『互いに気遣いをし続けること』ができるかどうか」「にかかっていると一言でも過言で

はないのです。

ですから、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する「ためには、「常に『気遣い』をす
る」という『人間関係』のルール」が必要になるのです。

「年長者」は「年少者」をいたわり、導く
「年少者」は「年長者」に素直に従う

※ここで言う「いたわる」とは、『弱い立場にある人』等に、同情の気持ちを持って親切に接する「気を配って大切に世話をする」という意味です。

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、『年長者』は『年少者』をいたわ

り、導く』『年少者』は『年長者』に素直に従う」という『人間関係』のルール』が必要になります。

世の中の全ての人には、自分より「年上の人（年長者）」と「年下の人（年少者）」がいいますが、「年長者」と「年少者」には様々な違いがあります。

例えば、子供の頃は、基本的には、「年少者」より「年長者」の方が、「体力」と「筋力」があります。

逆に、年をとると「体力」と「筋力」が衰えるので、「年長者」は「年少者」にかなわなくなります。

また、基本的には、「年少者」より「年長者」の方が、「人生経験」があるので、「知恵」と「賢さ」があります。

逆に、「年少者」は「人生経験」が少ないので、「失敗の経験」も少ないですし、いい意味で「無知」です。

ですから、「年長者」より、失敗を恐れずに「思い切った行動」「積極的な行動」をすることができます。

また、基本的には、「年少者」より「年長者」の方が、様々な「全体」において立場が上です。

また、基本的には、「年配の人」より「若い人」の方が、新しい時代に適応しています。

このように、「年長者」と「年少者」には様々な違いがあるので、『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられる世の中）』を表現させ、維持するためには、「年長者」と「年少者」の違いをカバーし、双方が「幸福」になれるようにするための『人間関係』のルールが必要になります。

世の中には「平等」という考えがありますが、「年長者」と「年少者」には様々な違いがあるので、「年長者」と「年少者」が「平等」に扱われたら、「年長者」も「年少者」も、「幸福」になれなくなります。

例えば、子供の頃は、「年少者」より「年長者」の方が「体力」と「筋力」があるので、「年長者」と「年少者」が「平等」の関係で争ったら、「年長者」が一方的に勝ってしまいます。

逆に、年をとると「体力」と「筋力」が衰えるので、「年長者」と「年少者」が「平等」の関係で争ったら、「年少者」が一方的に勝ってしまいます。

また、基本的には、「年少者」より「年長者」の方が、「人生経験」があり、「知恵」と「賢さ」があるので、「年少」であることが考慮されずに、「年長者」と「年少者」が「平等」に扱われたら、「年長者」だけが「いい思い」をし、「年少者」は虐げられてしまいます。

また、基本的には、「年配の人」より「若い人」の方が新しい時代に適応しているので、「年長」であることが考慮されずに、「年長者」と「年少者」が「平等」に扱われたら、「年長者」は「邪魔者扱い」されてしまいます。

このように、「年長者」と「年少者」には様々な違いがあるので、「年長者」と「年少者」が「平等」に扱われたら、双方ともに「幸福」になれなくなるのです。

ですから、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する「ためには、「年長者」と「年少者」の違いをカバーし、双方が「幸福」になれるようにするための『人間関係』のルール」が必要になるのです。

さて、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する「ためには、「年長者」と「年少者」の違いをカバーし、双方が「幸福」になれるようにするための『人間関係』のルール」が必要になるのですが、この『人間関係』のルール」が、『年長者』は『年少者』をいたわり、導く、『年少者』は『年長者』に素直に従う」という「ルール」です。

世の中の全ての人が、常に、この「ルール」に従っていれば、「年長者」と「年少者」が争うことはありません。

また、争ったとしても、この「ルール」に従わせれば、それを収めることができます。

例えば、兄と弟が同時にトイレに行きたくなっても、トイレが一つしかなかったり、それぞれが見たいテレビ番組があっても、テレビが一台しかなかったりする状況で、『年長者』と『年少者』は『平等』である」という「ルール」に従っていたら、それぞれが、「自分には、先にトイレに行く権利がある」「自分には、見たい番組を見る権利がある」と主張して争うことになりません。

ですが、それぞれが、『年長者』は『年少者』をいたわり、導く』『年少者』は『年長者』

に素直に従う」という「ルール」に従っていれば、兄は、弟をいたわり、導かなければなりませんし、弟は、兄に素直に従わなければなりません。

ですから、兄弟が、共に、この「ルール」に従っていれば、互いに譲り合って、争うことはないのです。

また、もし、親が「兄弟が譲り合って決まらない」を見たら、もしくは、「兄弟が争って決まらない」を見たら、まず、兄を先にトイレに行かせます。

そして、その後で、兄に対して、「あなたは兄なのだから、我慢できるときは、弟に先に行かせてあげなさい（弟をいたわり、導きなさい）」と言います。

また、弟に対しては、「あなたは弟なのだから、兄に素直に従いなさい」と言います。

また、兄には、「外で『年上の人』と接しているときは、自分が『年下』なのだから、その人に素直に従いなさい」と言い、弟には、「外で『年下の人』と接しているときは、自分が『年上』なのだから、その人をいたわり、導きなさい」と言うのです。

「一つしかないもの」を二人が「使いたい」と言って争っているときに、それを収めるためには、それを「順番に使わせる」しかありませんが、「順番に使わせる」ためには、「主張すること」を教えるのではなく、「譲り合うこと」を教える必要があります。

つまり、「それぞれに『譲ること』を求める公平なルール」を教える必要があります。

『年長者』は『年少者』をいたわり、導く』『年少者』は『年長者』に素直に従う」という「ルール」は、「それぞれに『譲ること』を求めるルール」です。

また、この「ルール」に従っていれば、たとえば、家庭内では「年長者」でも、「社会生活」においては「年少者」になることがありますし、逆に、家庭内では「年少者」でも、「社会生活」においては「年長者」になることがあります。

つまり、この「ルール」は、誰でも「年長者の立場」と「年少者の立場」になる、「社会全体」を貫く「公平なルール」なのです。

ですから、この場合、兄と弟に、『年長者』は『年少者』をいたわり、導く』『年少者』は『年長者』に素直に従う」という「ルール」を教え、それに従わせれば、「兄（年長者）」

と「弟(年少者)」の違いをカバーし、「双方を『幸福』にすること(今回は兄が先に使っても、次回は弟が先に使えるようにすること)」ができるのです。

このように、「年長者」と「年少者」が争ったとしても、この「ルール」に従わせれば、それを収めることができるのです。

また、世の中の全ての人が、『年長者』は『年少者』をいたわり、導く」という「ルール」に従っていれば、世の中の全ての「年少者」は、より「幸福」になれます。

「年長者」は「年少者」より長く生きているので、基本的には、「年少者」より「知識」と「経験」があります。

ですから、世の中の全ての「年長者」が、自分が持っている「知識」「経験」「成功から学んだこと」「失敗から学んだこと」等を「年少者」に教え、より良い人生を歩めるように導けば、「年少者」は、より多くのことを、より早く学ぶことができますし、「間違い」や「失敗」を減らすこともできます。

ですから、世の中の全ての人が、『年長者』は『年少者』をいたわり、導く」という「ルール」に従っていれば、世の中の全ての「年少者」は、より「幸福」になれるのです。

また、世の中の全ての人々が、『年長者』は『年長者』に素直に従う」という「ルール」に従っていれば、世の中の全ての「年長者」は、より「幸福」になれます。

全ての人に当てはまるわけではありませんが、基本的に、「年長者」は「年少者」に、あまり「馴れ馴れしく」されるといい気分はしません。

逆に、「年長者」として立ててもらおうと、少なからず「うれしく」思います。

ですから、世の中の全ての「年少者」が、「年長者」と、どれだけ親しくなっても、立てるべきところは立て、素直に従っていけば、世の中の全ての「年長者」は、より「幸福」になれるのです。

もし、「年長者」が「横柄」であったり「いい加減」であったりするなら、その人とは距離を置けばいいのです。

『年長者』に素直に従う」というのは、「自分の『信念』を曲げてまで従う」ということではなく、あくまで、『共存共栄の世の中（全ての人々が幸福を感じられる世の中）を実現させ、維持するため』に素直に従う」ということです。

ですから、「年長者」に対してでも、「言うべきこと」は、はっきり言わなければなりませんし、「反対すべきこと」は、あくまで「反対」しなければなりませんし、「断わるべきこと」は、流されずに、しっかり断わらなければなりません。

世の中の全ての「年少者」が、このような点をしっかりと押さえた上で、「年長者」に素直に従っていけば、世の中の全ての「年長者」は、より「幸福」になりますし、「年少者」も、特別に「嫌な思い」をしないでいられるのです。

さて、このように、世の中の全ての人が、『年長者』は『年少者』をいたわり、導く、『年少者』は『年長者』に素直に従う」という「ルール」に従っていれば、「年長者」と「年少者」が争うことはないのです。

また、争ったとしても、この「ルール」に従わせれば、それを収めることができるのです。

また、全ての人が、この「ルール」に従っていれば、全ての「年長者」と「年少者」は、より「幸福」になれるのです。

人によっては、「『年長者』と『年少者』の人間関係」に「平等」という考えを当てはめようとしますが、「年長者」と「年少者」には様々な違いがあるので、「年長者」と「年少者」が「平等」に扱われたら、双方ともに「幸福」になれなくなるのです。

「年長者」と「年少者」が「幸福」になれるようにするためには、双方ともに「幸福」になれるようにするための「『人間関係』のルール」、つまり、「『年長者』は『年少者』をいたわり、導く」「『年少者』は『年長者』に素直に従う」という「『人間関係』のルール」が必要になります。

これらのことから分かるように、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、「『年長者』は『年少者』をいたわり、導く」「『年少者』は『年長者』に素直に従う」という「『人間関係』のルール」が必要になります。

男女は互いに「思いやり」を持って接する

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、「男女は互いに『思いやり』を持って接する」という『人間関係』のルールが必要になります。

世の中には、「男性」と「女性」がいますが、それぞれの「性質」には違いがあります。

また、その「性質」の違いから、さらなる「性質」「考え方」「生き方」等の違いが生まれます。

例えば、基本的には「男性」は「女性」より力が強いので、「女性」に対して横柄になりがちです。

「女性」は、その中で生活しているため、「男性」より、少なからず「したたか」になります。

また、「女性」の体は、子供を産み、育てるようになってきているため、体を大切にすることが

ありますが、「男性」は、その必要がないため、行動の面で「女性」より活発になります。

また、「男性」は、「女性」より物事を追求する「欲」が強く、「女性」は、「男性」より『運命』を受け入れる感覚があります。

「男性」と「女性」には、このような違いがありますし、これらから、さらなる違いが派生するので、「男性」と「女性」には様々な違いがあるのです。

さて、「男性」と「女性」には様々な違いがあるので、「男性」にとっても「女性」にとっても、異性のことを理解するのは簡単ではありません。

ですから、「男性」と「女性」は、得てして、それが原因で「対立」しがちです。

また、「男性」と「女性」には、「恋愛感情」や「嫉妬」といった「感情」がからむので、よい「対立」しやすくなります。

ですが、もし、『男女が対立すること』が当然の世の中になってしまったら、「男性」も「女性」も「幸福」になれなくなります。

単純に考えると、世界の人口の半分が「男性」で、残りの半分が「女性」です。

ですから、もし、『男女が対立すること』が当然の世の中になってしまったら、「世界の半分の人」と「残りの半分の人」が「対立」することになります。

また、世界中の「恋人」や「夫婦」が「対立」することになり、その結果、家庭が崩壊し、世の中が滅茶苦茶になってしまいます。

このことから分かるように、『男女が対立すること』が当然の世の中になってしまったら、「男性」も「女性」も「幸福」になれなくなるのです。

ほとんどの人は、考えたことがないかもしれませんが、「男女が『対立』すること」は、世の中の全ての人の「幸福」に関わる重大な問題なのです。

さて、『男女が対立すること』が当然の世の中になってしまったら、「男性」も「女性」も「幸福」になれなくなるので、『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられる世の中）』を実現させ、維持する」ためには、「男性」と「女性」を「対立」させないようにするための

「『人間関係』のルール」が必要になります。

つまり、「男女は互いに『思いやり』を持って接する」という『『人間関係』のルール』が必要になります。

「男性」と「女性」には様々な違いがあるので、異性のことを理解するのは簡単ではありません。
ん。

ですが、たとえ理解するのが難しくても、「『男性』と『女性』には様々な違いがあること」や「理解するのが難しい部分があること」を理解し、それを受け入れ、常に、互いに「思いやり」を持って接していれば、根本的な部分から「対立」することはありません。

「男性」と「女性」には、それぞれの「長所」「短所」「向き」「不向き」があります。

また、『『男性』』にとっては『面白くないこと』でも『女性』にとっては『面白くないこと』がありますし、その逆のこともあります。

また、『『男性』』にとっては『関心があること』でも『女性』にとっては『関心がないこと』

がありますし、その逆のこともあります。

このような「違い」があることを理解し、それを受け入れ、常に、互いに「思いやり」を持って接していれば、根本的な部分から「対立」することは不会いのです。

人によっては、異性の気持ちを理解しようとしなかったり、異性との関係を「駆け引き」のように考え、『『思いやり』のない接し方』『自分本位な接し方』をしてしまいますが、そのような「接し方」をしていたら、当然、相手と「対立」することになります。

また、世の中の全ての人が、そのような「接し方」をしていたら、世の中の全ての「男性」と「女性」が「対立」することになります。

そして、その結果、世の中の全ての人が「幸福」になれなくなるのです。

ですから、『『共存共栄の世の中』を表現させ、維持する』ためには、「男性」と「女性」を「対立」させないようにするための『『人間関係』のルール』が必要になるのです。

つまり、「男女は互いに『『思いやり』を持って接する』という『『人間関係』のルール』が

必要になるのです。

「親」は「子」をしつかり育てる 「子」は
「親」をしつかり養う

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、「『親』は『子』をしつかり育てる」「『子』は『親』をしつかり養う」という「『人間関係』のルール」が必要になります。

人間は、赤ちゃんのときは、自分では何もできないので、「食事」「着替え」、その他全てのことを「親」にしてもらう必要があります。

また、自立するまでの間も、「親」に面倒を見てもらう必要があります。

ですから、『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられる世の中）』を實現させ、維持する「ためには、世の中の全ての「親」が、自分の「子供」をしっかりと育てる（面倒を見る）必要があります。

また、人間が「幸福」になるためには、『幸福になる』ために必要な能力」を身に付ける必要がありますが、それは、放っておいて自然に身に付くわけではありません。

ですから、『共存共栄の世の中』を實現させ、維持する「ためには、世の中の全ての「親」が、自分の「子供」を、『幸福になるために必要な能力』を身に付けた人間」に、しっかりと育てる必要があります。

「大和思想」においては、自分の「子供」を、五章で説明した『大和思想を實踐する人』のあり方（『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方）の状態に育てます。

つまり、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめている」「常に、あらゆる『恩恵』に心から『感謝』している」

「常に、自分の『運命』を受け入れている」

「常に、『共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事』と『共存共栄の世の中を乱す物事』を

見分けている」

「『論理的思考能力』を持っている」

「『優先順位の一番』を『世の中全体』にしている（自己犠牲の精神を持っている）」

「『謙譲の精神』を持っている」

「『優しさ』と『厳しさ』を持っている」

「『勇氣』と『精神的強さ』を持っている」

「常に『平常心』を保っている」

「常に『向上心』を持っている」

「常に『真剣さ』を持っている」

「常に『健康』を維持している」

「大和思想」においては、このような状態、このような能力を身に付けた人間に育てるのです。

このような人間だけが、『幸福になるために必要な能力』を身に付けた人間」というわけではありませんが、これらは、人間が「幸福」になる上で、とても重要な能力なので、「子供」を育てるときは、大体は、このような人間に育てる必要があります。

人によっては、自分の「子供」を「自分に都合のいい人間」に育てようとはしますが、自分の「子供」であっても、相手は一人の「独立した個人」です。

ですから、たとえ、自分の「子供」であっても、相手を「尊重」し、「幸福になるために必要な能力」を身に付けた人間」に、しっかり育てなければなりません。

「親」が「子供」をしっかりと育てなかったら、「子供」は、そのような人間になれません（そのような能力は身に付きません）。

「子供」が、自力で、そのような能力を身に付けるのは不可能ではありませんが、それは簡単ではないのです。

つまり、「親」が「子供」をしっかりと育てなかったら、その「子供」は、『幸福な人生』を歩むこと」が難しくなるのです。

ですから、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての「親」が、自分の「子供」をしっかりと育てる必要があるのです。

さて、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての「親」が、自分の「子供」をしっかりと育てる必要があるのですが、その一方で、世の中の全ての「子」は、

自分の「親」をしっかりと養う必要があります。

人間は、年をとったら体力が衰え、人の「助け」がなければ生活できなくなります。

ですから、『共存共栄の世の中』を現実させ、維持する（全ての人が『一生を通じて幸福を感じられる』ようにする）ためには、世の中の全ての「子」が、自分の「親」をしっかりと養う必要があるのです。

「親子」と言っても、それぞれが「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、「考え」が合わないことがありますし、「意見」が「対立」することもあります。

また、「親」と言っても「完璧な人間」ではないので、「間違い」や「失敗」をすることもありますし、「納得できないこと」や「良くないこと」をすることもあります。

ですが、どのような理由があろうと、『共存共栄の世の中』を現実させ、維持する「ため」には、世の中の全ての「子」が、自分の「親」をしっかりと養う必要があるのです。

自分の「親」をしっかりと養うのは、自分を生み、育ててくれたことに対する「お礼」であり、

「家族」に対する「責任」であり、「人間社会」を構成する一員」としての「義務」なので
す。

世の中の全ての「子」は、このような意味でも、また、『共存共栄の世の中』を
実現させ、維持する」ためにも、自分の「親」をしっかりと養う必要があるのです。

さて、このように、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中
の全「親」が、自分の「子」をしっかりと育てる必要があるのです。

また、世の中の全ての「子」が、自分の「親」をしっかりと養う必要があるのです。

世の中の全ての「親」が自分の「子」をしっかりと育てなかったら、世の中の全ての「子」が
生活できなくなりますし、『幸福になる』ために必要な能力」を身に付けることもできないの
で、世の中の全ての人が「幸福」になれなくなります。

また、世の中の全ての「子」が自分の「親」をしっかりと養わなかったら、世の中の全ての
「親」が、生活するのが困難になり「幸福」になれなくなります。

ですから、「『共存共栄の世の中』を實現させ、維持する」ためには、世の中の全ての「親」が、自分の「子」をしっかりと育て、世の中の全ての「子」が、自分の「親」をしっかりと養う必要があるのである。

このことから分かるように、「『共存共栄の世の中』を實現させ、維持する」ためには、「親」は「子」をしっかりと育てる、「子」は「親」をしっかりと養う」という『人間関係』のルールが必要になります。

「老人」を敬う

※ここで言う「『老人』を敬う」とは、「『老人』を『尊い存在』と考え、丁寧に接する」「『老人』を『尊い存在』と考え、それを行動や態度に表す」という意味です。

また、これは、自分の「両親」「祖父母」だけでなく、「世の中の全ての『老人』を敬う」

ということですが。

『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する「ためには、『老人』を敬う」という『人間関係』のルール」が必要になります。

世の中には、「体が衰え、若い人と同じように働いたり、活動することができない」という側面だけを見て、「老人」を「邪魔者扱い」する人がいますが、「老人」は、すでに、長い間「社会」に貢献してきた存在です。

一生懸命働いて「家族」を養ったり、税金を納めて「国家」を支えたり、「社会活動」を通じて「社会」に貢献したり、「有益な情報」を若い人に伝えたりと、長い間、様々なことを通じて「社会」に貢献してきました。

人間は生きていれば年をとりますし、年をとれば体が衰え、若い人と同じように働いたり、活動したり、「社会」に貢献したりすることができなくなります。

ですが、「老人」は、すでに、長い間「社会」に貢献してきたのです。

ですから、世の中の全ての人は、「長い間『社会』に貢献してくれたことに『感謝』する」という意味で、当然のこととして『老人』を敬うべきだと言えます。

どのような「全体」においても、「全体」に貢献した人が、それ相応の「報酬」を受けるのは当然のことです。

ですから、世の中の全ての人は、長い間「社会」に貢献してくれた「老人」に対して、当然

のこととして、『全ての人から敬われる』という報酬を与えるべきなのです。

さて、このように、世の中の全ての人は、本来は、当然のこととして『老人』を敬うべきなのですが、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する「ためにも、『老人』を敬う」必要があります。

世の中には、「老人」を「邪魔者扱い」する人がいますが、もし、『老人を邪魔者扱いすること』が当然の世の中」であつたら、全ての人が、年をとつたら苦しい思いをし、「幸福」を感じられなくなります。

また、『老人を邪魔者扱いすること』が当然の世の中」であつたら、多くの人が、「どうせ一生懸命『社会』に貢献しても、年をとつたら『邪魔者扱い』される」と考え、「社会」に貢献する「意欲」をなくしてしまいます。

そして、その結果、『共存共栄の世の中』を實現させ、維持すること」ができなくなります。

このように、『老人を邪魔者扱いすること』が当然の世の中」であつたら、全ての人が、年をとつたら「幸福」を感じられなくなりますし、多くの人が、「社会」に貢献する「意欲」をなくしてしまうので、『共存共栄の世の中』を實現させ、維持すること」ができなくなるのです。

ですから、世の中の全ての人は、『共存共栄の世の中』を實現させ、維持する」ためにも、『老人』を敬う」必要があるのです。

さて、これらのことから分かるように、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人が、「『老人』を敬う」必要があるのです。

「老人」と接するときは、相手を「尊い存在」と考え、丁寧に接します。

相手の体が衰えていることを考え、丁寧に、親切に接します。

「老人」が歩いているとき、横断歩道を渡っているとき、階段を上っているとき、下りているとき等は、それを温かく見守ったり、手伝ってあげたりします。

『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人が、このように『老人』を敬う」必要があるのです。

つまり、『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する「ためには、『老人』を敬う」という『人間関係』のルール」が必要になるのです。

まとめ

それでは、ここで、六章の「まとめ」をしたいと思います。

人間が「幸福」になるためには、『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる

『精神的充足、安定』が必要不可欠です。

ですから、「『共存共栄の世の中（全ての人が幸福を感じられる世の中）』を實現させ、維持する」ためには、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」必要があります。

また、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、「『世の中の全ての人の尊厳を保つこと』ができる『人間関係』のルール」をつくる必要があります。

そして、世の中の全ての人が、常に、その「『人間関係』のルール」に従って、人と接する必要があります。

『世の中の全ての人の尊厳を保つこと』ができる『人間関係』のルール」をつくり、世の中

の全ての人が、常に、それに従って人と接する。

そうすることによって、「世の中の全ての人を『尊厳』を保つこと」ができるのです。

そこで、六章では、「世の中の全ての人を尊厳を保つこと」ができる『人間関係』のルールについて、つまり、「『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方」について説明しました。

「『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方」は、次のとおりです。

「相手を『尊重』する」

「常に『気遣い』をする」

「年長者」は「年少者」をいたわり、導く」「年少者」は「年長者」に素直に従う」

「男女は互いに『思いやり』を持って接する」

「親」は「子」をしっかりと育てる」「子」は「親」をしっかりと養う」

「老人」を敬う」

これが、「共存共栄の世の中」における「人間関係」のあり方」なのです。

「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、世の中の全ての人が、これをしっかりと理解する必要があります。

「共存共栄の世の中」における「人間関係」のあり方」が分からなければ、いくら「世の中の全ての人の『尊厳』を保ちたい」と思っても、人と接するときに、「どのような点に注意すればいいか」が分からないので、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つこと」はできません。

逆に、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方」をしっかりと理解していれば、誰と接するときでも、「どのような点に注意すればいいか」が分かるので、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つこと」ができるのです。

このことから分かるように、「世の中の全ての人の『尊厳』を保つ」ためには、世の中の全ての人が、『共存共栄の世の中』における『人間関係』のあり方」をしっかりと理解する必要があります。

そして、常に、それに従って人と接する必要があるのです。

ですから、ここで理解したことは、絶対に忘れないでください。

そして、人と接するときは、常に、それに従って接してください。

あなたが、常に、それに従って接していれば、あなたが普段接している全ての人の「尊敬」は、常に、保つことができるのです。



大和
思想

六章